
デッドボール！ バッターアウト。

真逆作家醒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デッドボール！ バッターアウト。

【Nコード】

N3927BA

【作者名】

真逆作家醒

【あらすじ】

日本海に浮かぶ三つの人口浮島、総称フロートアイランド。中でも“居住島”で知られる辻島にて、夢敗れた青年、高藤たかふじ 公助こうすけは日々自堕落な生活を送っていた。だがある日、謎の放送と共に訪れる生物事故、島中を彷徨う人食鬼、映画の如き非日常。かつて野球に見捨てられた青年は、再びバットとボールを握り締め、あの頃の仲間と共に未来を切り開く。野球道具で人に暴行を加えてはいけません。

一話

夢。

それは叶えるものではなく、見るものである。

スポーツ選手になりたい。歌手になりたい。俳優になりたい。声優になりたい。アイドルになりたい。作家になりたい。弁護士になりたい。医者になりたい。社長になりたい。宇宙飛行士になりたい。総理大臣になりたい。

大抵の人間は、中学ないし高校時代に、そんなような願望を持っていたことだろう。こんな俺にだって高校を卒業する頃までは、絶対に野球選手になってやるといふ壮大な夢があったのだ。おそらく少年時代に夢を見たことのない人、もしくは、何かで大成したいと思ったことのない人は、そんなに居ない筈である。少なくとも、将来は平凡なサラリーマンとして生きて、大した成功は求めず、死ぬまで平和でさえあればいい、などと考えていた人間は少数派だと思う。別にサラリーマンを馬鹿にするわけではないが、というか一会社員として社会と家族に尽くしていくのは十分過ぎる程に立派で誇っている人世だが、それでも、世間知らずで身の程知らずだったあの頃は、自分こそはビッグになる男だ、もしくは特別な人間なのだと信じていたに違いない。全員が全員そうだとは言わないが。それにその気持ちは、夢を叶えてやる、成功してやるという気持ちは、間違っても卑下されるものではなく、とても綺麗で誇り高い、崇高な意気込みだけれど。だけれど、それでもやはり、あと数日で成人式を迎える現在十九歳の、過去、とことん現実に打ちのめされた俺は、主張する。

夢なんてものは、決して叶えるものではなく、見るだけに留めておくものである、と。もつと言うならば、夢は醒めるものである、と。冷めるもの、でも可だ。

何が言いたいかって、つまり夢なんか叶えなくても人間は生きて

いけるし、幸せで充足した人世だっていくらでも歩める。むしろ早々に現実を直視し、大学受験のために勉強に勤しんだ者や、楽しい人間関係を構築して来た者の方が、夢ばかり追って地に足の付いていない生き方をして来た者よりも、より良い安定した将来が待っているのではないか。いや、夢を追いながらも地に足の付いた生活だって出来るだろうし、そちらの方が充足感に満ちているのだろうが、だとしても夢を追い続けて破局してしまうよりは、普通に努力して普通に楽しんで普通に人生を過ごした方が絶対良いに決まっている。要は、夢を見る前に現実を疎かにするなということだ。そんな当たり前の現実を分かっている人間は、多分数える程度しか存在しないと思うが、というかそうあって欲しいが、未だに将来設計も立てずに眠りから覚めていない人間は、早急に足元を確認することを勧めする。でないとし生後悔することになる。

現に俺は、これ以上ない程の後悔をしてしまったのだから。

ここで、夢ばかり見すぎてまともな遊びも青春も恋愛経験も学力も知識も実績も何もかも過去に置いてけぼりにしてしまった、どうしようもない駄目人間である俺の人生を振り返ってみよう。

俺には、ある才能が著しく欠如していた。それはもう、凡人とかそういうレベルの話ではなく、真性の出来損ないや落ち零れのレベルである。そう、それは野球の才能。野球。前述した通り、俺はプロになりたいと願うほどに、野球という球技が大好きだった。主にバットと呼ばれる木製または鉄製の棒と、赤い縫い目が入った白球を使って点数を競い合う、国民的スポーツ。説明するまでもない。バットを握ったことのない人でも、キャッチボールの経験ぐらいはあるのではなからうか。ルールは知らなくても、テレビ中継や学校のグラウンドで男子が大声張り上げてるのを見たことぐらいはある筈だ。

だが、その才能が俺には絶望的なまでに欠けていた。皆無といっても言い。いや、もはや皆無よりも酷い。そのくせ劣等感と向上心だけは人一倍飛びぬけた人間だった。考え得る限り最悪な組み合わせ

せである。もし、才能が少しでもあれば、というか平凡でさえあれば。もし、もう少し諦めの良い性格だったならば。まだマシな人世になっていたかも知れない。今更そんな言い訳をしても遅いし、今の自分があるのは全て自らが望んだことをやった結果なのだから、文句も言えないが。それでも、だとしても、他に何かやりようはなかったのかと。自分で言うのもあれだが、悲劇の主人公を自称しているようにたたまたまれないが、俺の努力はあまりにも報われなかった。

例えばバッティング。

野球の攻撃には欠かせない、というか攻撃そのものであるところのバッティング。

驚くことなかれ、俺は小学一年生の頃から中学生になるまで、合計六年間の間、ヒットの数が二桁に到達していなかった。別に試合に出た回数が少なかったわけではない。むしろ、ことごとく人数ギリギリの野球チームにばかり入っていたため、レギュラーを落としたことが無いぐらいで、つまり試合数だけは人並み以上に経験している。それでヒット数が二桁行っていないのだ。公式試合だけの話ではなく、練習試合も合わせて。

と言つても、練習を怠っていたわけではない。し過ぎなぐらいだ。小学生時代のかなりの時間を素振りに費やしていたのだから。おかげで筋肉だけはそこそこ付いた。

例えばピッチング。

野球の守備には欠かせない、というかチームの守備力そのものを左右する、ピッチング。

驚くことなかれ、俺の投げる球はキャッチャーミットに入らない。ストライクを入れられないとかではなく、入らないのだ。これはもうノーコンどころの話ではなく、というか単に、マウンドに上がると極限に緊張してしまつたため、いや一種の混乱状態に陥つてしまうためである。そりゃあ、流石に練習の時は普通に入るが。試合で球がミットに入ったことがない。

あれは監督の『球が打てないなら投げればいいじゃない』という言葉により、それなりに投球練習を積み、練習試合で始めて登板した時のことである。気合を入れまくって試合に臨んだはいいもの、いざマウンドが上がってみると、尋常ではない感覚が全身を襲ったのだ。まず景色がぐるぐる回り、音がノイズと化し、身体が言うことを聞かなくなり、肌が熱くなり、心臓が暴れ出し、血が暴走し、意識が遠のく。それで気付いた頃には救護室で介抱されていた。

後からチームメイトに聞いた話によると、『一イニング中五球投げ、その全てがキャッチャーミットに収まることなく降板させられた』らしい。しかも二点も取られたというのだから、一体どんなへボ投球をやらかしたのか。投げてる間ほとんど意識が無かったため、よく覚えてはいないが、覚えていなくてよかった。きっと、さぞ無残で惨めな姿を晒したのだろうから。一体あれは何だったのだろう。か。あれから一度も試合で登板したことがないため、というか登板を禁止されたため、今となっては知るよしもない。

他にもまだまだある。

例えばキャッチング。チームのエラーの過半数を独占。

例えば送球。手渡し送球を推奨された経験のある選手がかつて居ただろうか。

例えば走塁。ベースで躓くのが得意技だった。

数え始めたらキリが無い。それぐらい無能な選手だった。選手とどうか、足を引っ張るただの重りである。『お前、敵チームのスパイなんじゃね?』と言われた時にはちよつと泣きそうになったりもした。

それでも頑張った。というか、だからこそ頑張った。才能がどんな底なら、最大以上の努力で埋め合わせればいい、と余計に意気込んだ。それがいけなかったのだが。素直に諦めていればよかったのだが、そんな利口な思考回路を、かつての俺は持ち合わせてはいなかった。天才は百パーセントの努力で生まれるものであって、才能なんて一パーセントもいらないと信じていたが、いや今でもそう信じてい

るが、百パーセントの努力をもつてしても、俺の才能はそれを下回り、余りあるものであった。皆が遊んでいる間に、素振りをした。皆が勉強している間に、遠投をした。皆が寝ている間に、ランニングをした。皆がお喋りをしている間に、ノックをした。誰もいない校庭で走塁練習をした。小遣いとお年玉を使い果たし、野球につき込んだ。家族旅行を断り、代わりにバッティングセンターに連れて行ってもらった。

結果、中学三年生になった頃。俺は人並みには野球が出来るようになっていた。あくまで人並みであって、特別上手かったわけではないけれど。それでも、相当の達成感にみまわれたのは確かだ。いつの間にか野球仲間も出来ていて、まあ、俺なんかよりも何倍も才能のある連中なのだが、あいつらとの思い出だけは、野球で唯一得ることの出来た掛け替えの無いものかも知れない。確か公園で一人で練習していて、気が付いたら一緒に練習していたのである。野球仲間と同じ高校を受験することを誓い合い、というか倍率が一未満だったため受験も何もなかったのだが、そして共に高校の野球部で汗を流した。ここからは波乱の野球人生で、どうやら俺以外の部員八人、全員が全員、いわば天才と呼ばれる種類の人間だったらしく、通常の練習でみるみる力を付けていったのだ。俺は自分だけが取り残されるのが許せなくて、部員の数倍もの練習を行ったが、差は離れていく一方だった。

とある事情で一年間公式試合停止をくらっていたので、高校二年生になり、初の甲子園出場の権利を賭けた県大会。数ある強豪高を圧倒し、なんと優勝を喫する。というかいくら練習をしても追いつかないのは当たり前で、この部員達、並みの天才ではなく、一人一人が神童と言っても過言ではないぐらいの実力者で、県大会優勝そのままの勢いで夏の甲子園を悠々と制覇してしまったのである。これには流石に驚愕を禁じえなかった。たったの部員九名で甲子園優勝を果たしたのだ、テレビでも多くの報道陣が持ち上げていた。特に全試合を一人で投げきったエース、空海森先輩と、最多安打数&

最多本塁打数を叩き出した四番、たからぎ 宝木先輩は異例の超人フレ高校球児として連日報道陣から遁走する日々だったそうだ。それからある事情で野球部は廃部となり、世間では伝説のナインとして語られるようになる。だがまあ、部が廃部になった後も俺はプロになるために練習を続けた。腹の立つことに、これ以上上達して何がしたいのか、嫌がらせなのだろうか、他八人の部員も共に練習に打ち込んだ。

この頃までは良かったんだ。問題はその後だ。高校卒業間近になり、俺は現実に打ちのめされることになる。

過剰なトレーニングの末に、俺は足を壊したのだ。肩ではなく、足だ。右足の神経を切ってしまったらしい。もう松葉杖無しで歩くことは出来ない、野球は諦めると医者に言われた。死刑宣告を受けた気分だった。満足に歩けもしない人間が、どうやってプロ野球選手になるうと言うのか。ただでさえ才能が著しくないのだ、こんな練習もできない身体で何が出来ようか。厳しいリハビリの末、一生歩けないとまで言われた筈の足を、気合と根性でなんとかこうして歩けるようになるまではしたが、走ることは確実に無理だろう。松葉杖無しで担当医の目の前で歩いて見せたら目を見開いて驚愕していたぐらいだからな。

そりゃあ怪我がなかったとしても、おそらくプロは難しかっただろうが、それでも一応は長年のオーバーワークの末、高三時にはそれなりの実力を付けていたのだ。その努力を怠らず、草野球でも続けていれば、ぎりぎりプロ試験でも通じるようになるだろう、とある名門コーチの御墨付きも貰っていた。実際、卒業後はその通りの生活を送ろうとしていたし、何年掛かっても諦めるつもりはなかった。

だが、実際はこれである。勿論、勉強なんてこれっぽっちもしてこなかったバカな俺なので、大学受験は進路の範疇に無かった。何せ高校卒業間近になっても因数分解が出来ないのだ。勝手に分解すんじゃないねえ、とよく文句を垂れていたのを覚えている。馬鹿にも程

がある。野球の練習があつたから、なんて言い訳は出来ないし、するつもりもない。ちゃんと部活と勉強を両立できないやつが悪いのだ。現に、『どれだけの肉体改造を施せばあんな鬼畜チームが生まれるんだ』と評判の運動能力を保有していた他八名の部員達は、学校のテストでもちゃんと点数を取っていたのだから。

それ以前に、大学受験以前に、生きること全般に対しての気力を失っていたのだ。魚が水を取られたように乾いた心境だった。今更どうやって野球脳を受験脳へとシフトさせると言うのか。世の中勉強したくても出来ない人間が山ほどいるのに、たかが球遊びが出来なくなつたぐらいで贅沢なことである、と言われても仕方がないが、だが球遊びしか人世を知らない人間からボールを取ったら何が残ると言うのだ。それから動乱の野球人生は幕を閉じ、文字通り夢も希望も失ってしまった俺は、進学も就職もすることなく、現在に至るまで二年間を無為に過ごした。

六歳から数えて十八になるまで十二年間、夢のために努力をすることだけが取り柄だった男の行き着いた先が、日々バイトで食い繋いで生きているだけの、大した趣味も生き甲斐も能力も学力も経歴もない、無気力なだけのぶー太郎である。いや一応、控えなしで甲子園優勝を果たした伝説のチームの背番号八番を背負っていたという、並々ならぬ経歴を持つてはいるが、今となってはそんなもの、ただ汚くて汗臭いだけのポロキレとして、物置の奥底で朽ち果てている始末だ。

まあ、何を言おうと、いくら嘆こうと、ちゃんと将来設計を考えていなかった、野球以外での道も作っておかなかつた自分の責任なのだが。実際、俺なんか千年修練を積んだとしても足元にも及ばない、あの八人の部員達でさえ、プロになつたのは空海森先輩と宝木先輩の二人だけで、他六人はそれぞれ野球以外の道を見つけ、輝かしい出世街道を歩んでいったのだから。というかやつら、別に特別野球が大好きだったわけではなく、何人かはほとんど片手間で練習していたのだ。腹立つわあ。思い出すだけで脳みその血管が千切

れまくって命が危ういのであまり深くは言及しないが、世の中どうかしている。まあ、卒業してからまともに連絡を取っていないため、というかやつらは俺とは違って暇じゃないため、今誰がどうしているのか細かくは知らないが。大雑把な説明だけしておく、背番号四番と九番であるところの、空海森先輩と宝木先輩のペアは卒業後すぐに渡米した。背番号一番のあいつは、ある日フラッと男子百メートル走の世界記録（なんと世界だ。日本ではなく）を大幅に更新しやがった後、どこぞへと蒸発していった。二番のあいつは詳細不明。三番のあいつは会社を起業し、自社の株価をぐんぐん上げている。五番のあの人は巨大な道場の跡を継いだ。六番のバカは、何やら妙な組織の幹部へと成り上がった。七番の謎々野郎は、謎が謎して謎ったらしい。

そして俺だけが、未だフリーターとしてブラブラしている。皮肉な話である。チーム内で、皆が引くぐらい努力しまくったと自負する俺だけが、夢に向かってまっしぐらの直線野郎がけが、落ちぶれたのだ。

なんてことはない、ただ夢しか見ていなかっただけのバカな男の結末である。

全部自己責任。取り立てて珍しくも、悲劇でも何でもない。

だって、生きる意味をなくしても、ぷー太郎と化しても、こうしてたらだら毎日を過ごせているのだから。

それに、慣れてきたら、全て諦めてしまった今では、こんな生活も存外悪くないと思っている。まだ二十歳前なのに、家に帰ったらゴロゴロしてるだけの生活は、見る人が見たら鼻で笑うのだろうが、笑いたきゃ笑えばいい。

俺はもう疲れた。頑張るのなんか止めだ止め。バカらしい。

あれだけやったんだ、もう休んだっていいじゃないか。

まあ、あれだ。夢なんか無理に叶えようとするものじゃない。特に、到底叶えられそうにない夢なんて論外だ。それが弁護士やら政治家なら、たとえ成れなくても、そのために培った知識で色々応用

が利くだろうが、プロ野球選手なんてのは最悪だ。叶えるにしても、もっと計画的に現実的に、である。決して俺の後を追うことなかれ。……。

そろそろバイトの時間だ。

いい加減、現実逃避はこのぐらいにして、最低限の飯代を稼ぎに行かなくては。

過去をいくら遡っても時間が戻ってくるわけでもないし。

でも、それでも、どれだけ開き直っても、今でも強く思う。

「悔しい」

一話（後書き）

不定期更新です。自由に書いていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3927ba/>

デッドボール！ バッターアウト。

2012年1月10日06時45分発行